

第 15 冊

『織田信長のマネー革命』

～経済戦争としての戦国時代～

武田知弘、ソフトバンク新書、2011年

第3回

関所の廃止

信長と言えば、天下統一に向かって数々の戦いや修羅場をくぐってきた英傑です。たしかに、完膚なきまで相手を打ち負かした**長篠の戦い**のような「強い信長」もありますが、命からがら戦場から逃げ帰った**姉川の戦い**のように「弱い信長」もあります。

本当のところ、軍事的なセンスはどうだったのでしょうか？そのことについて、今回のシリーズでは追及できません。学びたいのは、信長（織田家）の経済力や経済政策なんです。

今回は信長の「大金融改革」についてみてきました。

平安時代末から室町時代にかけて、日本では宋銭や明銭を大量に輸入し、使用してきました。なぜならば、国内で貨幣を鑄造していなかったからでした。ところが中国から輸入がストップしたこともあり、これらの銅銭が不足してしまうようになってしまいました。

戦国時代において、通貨供給量が不足し、デフレ状態に陥ったのでした。商品量や物流が増加しているのに、貨幣が不足して経済がまわらない状態になってしまった。それが信長が登場した頃の金融の実情だったんです。

そこで、信長は、不足する銅銭にかわって金や銀を通貨として使用するようにしたんです。それが信長の金融大改革でした。

さて、あなたが、**信長の「経済政策」**として、真っ先に思い出すのは何でしょうか？

信長と言えば、「楽市楽座」が有名です。でも、これ自体は信長のオリジナルではありません。すでに南近江の戦国大名六角氏がはじめており、信長以前にも何人かの戦国大名が取り組んでいました。

信長独自の新しい施策として注目されるべきは、**関所の撤廃**と**道路の拡幅**政策でしょう。

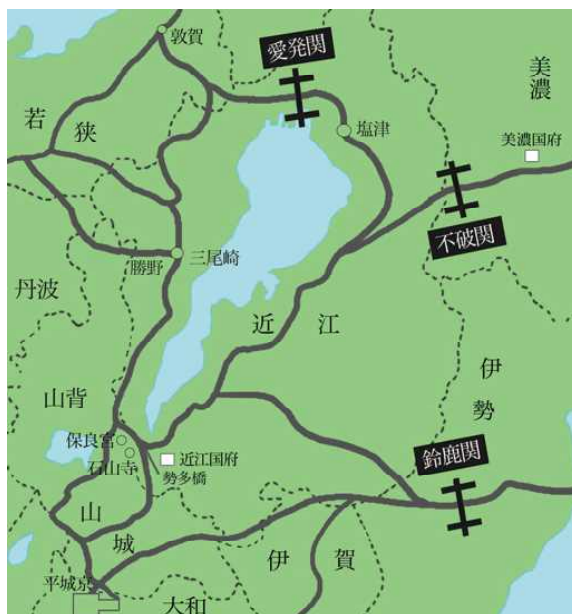
まず、質問です。**古代の関所の機能・役割は何でしょうか？中世の関所の機能・役割は何でしょうか？そして、近世の関所の機能・役割は何でしょうか？**

共通テストを受験するならば、この問いに答えられないとダメですよ。事実、2018年の共通テスト試行問題で第2問の問4に出題されています。資料を読み込んで、いつの時代の関所のことを述べているかを見極めて、古いものから順番に並べ替える問題でした。

まず、**古代の関所**は、「**軍事的機能**」を果たしました。都で発生した謀反人の逃亡の阻止をねらったものです。奈良時代の恵美押勝の乱でも政権側が関所をいち早くおさえました。それ以外にも、政府にとって不都合な情報（謀反の計画・実行者による地方への命令を含む）が関所の外に漏れないように阻止する「情報統制」の役割を果たしました。

ちなみに、**古代の「三関」を答えられますか？**

東海道の鈴鹿関、東山道の不破関、北陸道の愛発（あらち）関でした。鈴鹿峠から東のことを「東国」または「関東」と呼びました。平安時代中期以後は、愛発関に代わり、**逢坂関**が三関になりました。



※左の古代三関の地図は
「関ヶ原町歴史民俗学習館」
のホームページより引用

では、**中世の関所はどんな役割を果たしたのでしょうか？**そもそも中世の関所は、強力な中央政府が関所を作ったと言うよりは、朝廷や武家政権、荘園領主・有力寺社などの権門勢家がおのおのの独自に（勝手に）関所を設置しましたよね。それだけではありません。関所で「関銭（通行税）」を徴収しました。室町時代の京都では「七口」が設置され、京都に入るにはいずれかの関所を通行せざるを得ない状況が生まれました。

つまり、**中世の関所の機能・役割は関所を通る人たちから関銭をとって儲ける「経済的機能」**といふことができます。関所の数があまりに多くて、しかも関銭を取られるので、中世の交通・流通においては障害でしかなかったと言えます。

では、**近世の関所の機能・役割は何でしょうか？**江戸幕府や諸藩が、「警察上の必要」から関所を設置しました。有名な言葉に**「入り鉄砲に出女」**というものがあります。幕府防衛のため、江戸に流入する武器の取り締まりと、大名の奥方（人質）が江戸から逃げていかないように女性を厳しく取り締まったのでした。中世の関所と違って関銭を取ることはなく、**「治安・警察的機能」を果たしました。**



歌川広重「東海道五十三次」草津



草津本陣跡

信長が撤廃した関所というのは「関銭（せきせん）」を取り上げ、「物流」の邪魔ものである「中世の関所」でした。

というのも、信長のころまで、荘園がまだあちこちに残っていました。寺社や公家などの荘園領主が、自分の荘園の中を通る道などに関所を設け、通行人から関銭、つまり通行税を取っていました。それが荘園領主の収入源となっていて、商人たちにとって大変な負担になっていました。

商人も、自分が損するわけにはいかないので、関銭分を商品価格に上乗せせざるをえません。でも、値段が高くなれば売れないので、物流は停滞してしまう状況でした。

信長は、その様子を見て、商品流通を活発にするのと、荘園領主の力を削ぐため、関所の撤廃にふみきったのです。ですから、各地にたくさんの関所を作っていた寺社勢力たちからにらまれることになったのでした。物流をよくすることで、恨みを買うことになったわけですね。

いずれにしろ、信長は「中世の関所」をつぶしていったのでした。そのあたりのことを、**武田知弘氏の『織田信長のマネー革命』**では、次のように記されています。

信長は新しく領地を占領するごとに、その地域にある関所を撤廃してきた。

戦国時代、関所の数は半端ではなかった。そして各関所で「津料」「駄の口」と呼ばれる通行量（税）が取られた。「駄の口」というのは、牛馬や積み荷に課される税金である。つまりは物流税ということになる。これが課せられると、人は牛や馬をあまり使えなくなるので、交易される物の量が減るし、運送のスピードも遅くなる。

当時は、荘園が各地に入り組んでおり、荘園の領主は勝手に関所を作っていた。公家、武家、寺社、土豪などが、私的に関所を作っており、その数は膨大になっていた。

たとえば、寛正3（1462）年、淀川河口から京都までの間にはく A ぐカ所の関所があった。（『蔭涼軒日録』）

もちろん、これらの多数の関所は、人や物の流通を大きく阻害するものだった。戦国時代の京都は関所のために寂れたとも言われている。

地域の豪族たちにとって、「津料」「駄の口」は重要な収入源となっていた。それは、地域の武装勢力を肥やすことになり、戦国の世の治安の悪さにもつながったのである。信長の関所撤廃には、それらの弊害を一気に消滅させる狙いがあったわけである。

実は関所の撤廃は、戦国大名にとって命題の一つであった。関所というのは、戦国大名たちにはほとんどメリットがない。「津料」「駄の口」は、その地域の豪族、有力者などが勝手に課しているものであり、戦国大名たちには入ってこないのである。もちろん、戦国大名が自ら作った関所では「津料」「駄の口」を自分がもらうことができる。しかし、当時、開設されていた関所のほとんどは、大名たちの管轄ではなかったのだ。

そのため戦国大名たちは、躍起になって関所を廃止しようと試みた。しかし、地域の豪族、有力者などを力尽くで押さえるということはなかなかできにくく、関所の廃止は不完全なものだった。しかし信長は、関所に関しては有無を言わず廃止してしまったのである。こういう『毅然とした姿勢』が信長の特徴でもある。

イエズス会の宣教師ルイス・フロイスの報告書には「彼の統治前には道路において高い税を課し、1レグア（約5.6キロメートル）ごとにこれを納めさせたが、彼は一切免除し税を全く払わせなかったので、一般人の心を収攬（しゅうらん=人の心などをうまくとらえること）した」といったことが書かれている。



ルイス・フロイス

さて、上記の文中下線部の＜A＞に当てはまる数字を下記から1つ選んでください。

① 80

② 180

③ 280

④ 380

答えは、④の380か所でした。えーっ、淀川河口から京都までの間に380か所ですって！？「どんだけー」って思わず叫んでしまいます。寺社勢力、大名、公家などが関所を好き勝手に作ってしまった結果がこれなんです。これでは、関所を通るたびに関銭（通行料）を支払わなければならないわけですから、商品価格にその分を転嫁することになり、商品の値段は跳ね上がっていくことになるのは必然です。

信長は、この弊害を破壊し、商品流通の停滞を防ぎ、商品価格の上昇に歯止めをかけたのです。



さて、信長の政策でもう一つ注目されるのが**道路の拡幅政策**、**インフラ整備**です。

戦国時代ですから、道は狭く、曲がりくねったままです。当然のことですが、川には橋を架けていません。防御を優先させるので当然です。信長は、何と、それとは反対のことを実施しています。

まず、**道を広げ**ています。しかも、道の重要度に応じ、変化をつけています。

信長は、道の本街道・脇街道・在所道の**3つにランクづけ**し、本街道を3間（約6メートル）、脇街道を2間（約4メートル）、在所道を1間（約2メートル）と決め、道幅を広げました。しかも、主要街道には松と柳を植えさせています。

信長は「夏の暑い盛りでも商人たちの往来ができるようにした」と記録が残っており、文字通り、並木道ができたのです。

道をまっすぐに造り直したことも画期的で、信長は今でいうバイパスまで造っています。これも、物流を盛んにしたいという思いからきたもので、川に橋を架けたのも同じ理由ですね。

では、**物流を盛んにすることで、信長にはどんなメリットがあったのでしょうか？**

それまでの戦国大名は、百姓からの年貢を財政基盤としていました。信長は、百姓からの年貢だけでなく、**台頭してきた商人たちから運上金あるいは冥加金のような形で献金させることで財源を確保**していこうとしたのです。この財源があったから、お金で兵を雇う「**兵農分離**」が進んだという側面もありました。

兵農分離という言葉が出てきました。これは豊臣秀吉の**刀狩り**や**太閤検地**、**身分統制令（人払令）**などによって出来上がっていったのは知っていますよね。でも、すでに信長の時代にその萌芽というか土台というものが始まっていました。

戦国時代の合戦は、いつ行われていたのでしょうか？春ですか？夏ですか？秋でしょうか？

基本的に、**戦国時代の合戦は、秋の借り入れが終わった頃から翌春までの間の農閑期**に行われていました。主食である米の生産が完了した時点ではじめて戦を始めることができたのでした。

なぜかと言えば、戦国大名の重臣や一族郎党を除けば、兵士の大半は農民だったからです。農民が田植えや稲刈りで忙しい時期に兵として使う、つまり戦をするのは困難だったのです。

ですから、戦国時代、戦をするのは農閑期に限られていました。

ところが、信長の軍団は、農閑期以外でも戦ができる体制に近づいていました。どういうことでしょうか？

信長は、他の戦国大名ができなかった「専門兵士の育成」に成功していたのです。信長は今まで見てきたように、農業以外の産業、例えば商業や国内交易といったものを盛んにすることによって、錢を稼ぎ、その錢によって兵士を雇うということをしたのです。つまり、**徴兵制から傭兵制へシステムを変換**をさせたのです。

これは画期的なことです。信長の軍団が強かった背景には、この「傭兵制」があったんですね。

ちなみに、傭兵制の利点って何でしょう？

1つめは、農業との兼業職ではなく専門職なので、**1年中いつでも戦うことができます**。2つめは、傭兵たちは農業をやっていないので、**いつでも、どこにでも自由に移動・移転できる**ということです。

武田信玄にしても上杉謙信にしても、その軍団は長期間の移動・移転ができません。彼らの軍団の大多数は百姓です。たとえ彼らが京都まで進軍したとしても、農繁期になったら兵である百姓を本国まで戻さなければなりません。

ところが、信長の軍団は、傭兵制なので、京都に「常駐」できたのでした。これは、決定的な違いと言えます。ただし、豊臣秀吉やその後の江戸時代ほどには兵農分離はできあがっていませんでしたが。

話を元に戻しましょう。信長は商人たちから運上金あるいは冥加金のような形で献金させることで財源を確保しようとした。

ただ、残念ながら、どんなふうに信長が商人たちから金を徴収していたかはわかっていないのです。

いずれにしろ、信長は中世の関所を破壊し、物流を飛躍的にスピードアップさせていきました。もちろん、関銭を取らないわけですから、物価も下がっていくことになり、庶民が買い物をしやすくなっていくのでした。

じつは、それだけではなく、「**升の統一**」にも心を砕きます。

このあたりについても、**武田知弘氏の『織田信長のマネー革命』**で、みていきましょう。

商取引において、ものを量る単位というのは重要な意味がある。

信長以前、全国で共通の単位というものはなかった。これは非常に不便なことだった。．．．．．

永禄11（1568）年、上洛した信長は、翌年、京都で最も広く使用されていた十号升を全国統一の升とすることにした。これは「京枬」と呼ばれるものである。．．．．．

単位を統一すれば、物の流通は飛躍的に高まる。

また、信長がこの統一単位を作ったのは徴税の際の不正を防ぐという意味もあった。というのも、当時の代官などは、升の大きさを操作することで私腹を肥やす者が多かったのだ。領民から年貢を徴収するときには大きな升を使い、集めた年貢を集計して領主に報告するときには小さな升を使う。その差額分を着服するのである。

これでは領民としてはたまらない。中世から戦国時代にかけては、升に不正があるとして、一揆が起こることもあったのだ。そのため、信長は升を「京枬」に統一し、不正が起こらないようにして、農民の負担を減らしたのである。

あれっ？山川出版社の教科書「詳説日本史B」では、秀吉が「それまでまちまちであった枬の容量も**京枬**に統一」したとありますが、すでに信長の時代に「京枬」の使用が始まっていたのですね。ただ、残念ながら全国で使用されるようになるのは、豊臣秀吉の時代だったということなんです。



東洋計量史資料館の
ホームページから
豊臣秀吉が定めた升（京枬）

楽市楽座令

次に、信長の経済政策として超有名なものに「楽市楽座」がありますね。楽市楽座とは、何でしょうか？

楽市楽座とは、「座」を廃止し、商人が自由に物を販売でき、税を課さないという政策です。それまでの商人は、ほとんどの場合、「座」に属しないと商売ができませんでした。鎌倉時代中期から、あらゆる職業に「座」というものが作られていました。布、酒、油などの販売業者だけでなく、建築業者、運輸業者からはては芸能関係にまで「座」は作られていました。

芸能関係の「座」といえば、何を思い出しますか？ここは、入試でも出てくるので[山川出版社の『詳説日本史B』](#)を参照しましょうか。

「能も北山文化を代表する芸能であった。古く神事芸能として出発した猿楽や田楽は、いろんな芸能を含んでいたが、その中からしだいに歌舞・演劇の形を取る能が発達していった。この頃寺社の保護を受けて能を演じる専門集団（座）が現れ、能は各地でさかんに興業されるようになった」

とあります。では、質問です。

大和猿楽四座が有名ですが、四座とは何でしょうか。すべて教えてください。次に、この大和猿楽四座の本所はどこですか？また、観世座から出て能を大成させていった父子は誰でしょうか？さらに、彼らを保護した室町幕府の将軍は誰でしたか？

答えは、順番に、四座とは金春（こんぱる）・金剛（こんごう）・観世（かんぜ）・宝生（ほうしょう）でした。次に四座の本所は「興福寺」でした。また、父子の名前は観阿弥（父）と世阿弥（子）でした。さらに、2人を保護した幕府将軍は三代将軍足利義満でした。

楽市楽座のメリットは？

では、**中世の日本で有名な「座」には、どんなものがありましたか？**

山川出版社の教科書「詳説日本史B」には「大寺社や天皇家から与えられた**神人（じにん）・供御（くご）人**の称号を根拠に、関銭の免除や広範囲の独占的販売権を認められて、全国的な活動を見せた座もあった」とあります。

実は「座」は平安時代の後期から、商売人は大寺社や天皇家に属して販売や製造についての特権を認められて登場しました。やがて、彼らは同業者の団体である座を結成するようになりました。座の構成員の内、**大寺社に属した者は神人、天皇家に属した者は供御人**と呼ばれました。

そして、「座」の例として、いくつか挙げてあります。これも教科書から引用します。

「**大山崎の油神人（油座）**は、石清水神宮を本所とし、畿内・美濃・尾張・阿波など10か国近い油の販売と、その原料の荏胡麻購入の独占権を持っていた。京都では**北野社の麴（こうじ）座神人、祇園社の綿座神人**などが有名であった」



現在の大山崎油座



油座の石碑

つまり、「座」を作ることで、**既存の商人たちは新規参入を防ぎ、独占営業権を得ていたのです。既存の商人たちは多額の参加料（座役といいます）を払うことで「座」に参加し、その特権を手に入れていたのです。**

信長は、その座を無くそうとしたのです。そのことについて、**武田知弘氏の『織田信長のマネー革命』**では、次のように指摘されています。

しかし**楽市楽座**によって、誰もが商売を行えるようになったのだ。永禄11（1568）年、信長が岐阜の城下町造成のために、**加納にくだした制札にはおおよそ次のようなことが記されていた。**

- ・加納の市に来る商人の往来を妨げてはならない。屋敷地や家屋ごとの諸課税は免除する。
- ・市の場所の独占、座の特権は全く認めない。自由売買とする。
- ・市でトラブルがあっても信長家の者が勝手に介入してはならない。

これを見れば、**加納の市にいけば、税金も規制もない、全く自由な商売ができた**ということがわかる。

でも、疑問があります。**座を廃止して（楽市楽座を実施して）信長には何のメリットがあったのでしょうか？**

信長の城下町に商人を自由に出入り・商売をさせて、税金もかけないとすれば、人や金が集まるので町は発展します。しかし、信長の税収が増えるわけではないですよ。信長は領民の生活を豊かにするためだけに、楽市楽座を実施したのでしょうか？そういうお人よしだったのでしょうか？

武田知弘氏の『織田信長のマネー革命』では、次のように述べられています。

・・・信長にもちゃんとメリットはあったのだ。

まず第一に、街が発展し、商人が多く出入りするようになるということは、信長にとって戦略物資を調達しやすいということである。

戦争をするには、兵糧や武器など様々な物資が必要である。領内だけで必要な物が生産できればいいが、そうはいかない。だから、それらの調達は商人に依存せざるをえないのである。商人があまりいないような街では、戦略物資の調達はなかなか難しい。だから、商人の行き来が多い流通の発達した街が戦国大名には必要だったのである。

また、既存の市や座は、寺社や公家らが取り仕切っており、地子銭（固定資産税）や冥加金（売上税）などは、寺社や公家の収入となっていた。つまり、旧来の市や座は信長にとってはほとんど収益をもたらさなかったのだ。

だから信長は、既存の市とは別の市を作り、寺社や公家の影響力を排除したのである。そして**地子銭は取らないけれど、冥加金はとっていたようである**。だから信長は冥加金の分だけ儲かるという寸法である。もちろん街が発展すれば、冥加金の収入も増える。

これまでの市や座では信長には何の儲けも出なかったが、新しい自由市を作ることで大きな収益を上げることができたのだ。

なるほど！楽市楽座は信長にもメリットがあるんですね。**商人が集まり自由に取引をしていけば、信長が欲しい品物も城下町に集まってくるということ**です。特に合戦で必要な武器の類もそうでしょうし、合戦が行われるということは兵糧米も必要になります。鉄砲には火縄も必要ですし、薬などの医薬品も必要ですよ。鉄砲や槍などの武器の補修も必要になります。それらの戦略物資が、信長の城下町に集まってくるということは、逆のことを考えれば大きな「武器」「特典」ということになります。

また、既存の市や座を支配する寺社や公家に上納されるはずのお金が**信長の城下町では、信長のもとに上納される**ことになります。

信長って、賢いですね。いや、天才と言ってもいいのではないのでしょうか。



安土城下の
町並み

「価格破壊」をもたらした！！

ところで、戦国時代、楽市楽座は一部の大名の中で行われていた施策でした。誰が最初に始めたのかはわかっていません。記録の上では、天文18（1549）年、近江の六角義賢（よしかた）が観音寺城下に行ったものが最も古いそうです。

また信長は、その領地の全てで楽市楽座を施行したわけでもありません。**楽市楽座を行ったのは、加納、安土、金森など、領地の一部だけ**で、京都をはじめとする多くの領地では楽市楽座は行われませんでした。

ですから、信長が領国全てに楽市楽座を実施し、完全な自由な経済活動を推奨していたわけではありません。そのことで、信長の行った楽市楽座を「たいしたことない」とか「中途半端だ」といって評価しない学者もいます。でも、**武田知弘氏の『織田信長のマネー革命』**では、下記のように断じておられます。

しかし、だからといって、信長の楽市楽座政策の意義が減じるものでもない。**信長の楽市楽座政策は、日本の商業に「価格破壊」をもたらしたからである。座というのは、同業者が集まって領主などの後ろ盾を得て「独占販売権」をもらい、新規参入を拒むという性質のものである。座では、もちろん「カルテル」の状態にあり、物品の価格は高く設定される。**

しかし、ある地域で楽市楽座が実施されれば、そのカルテルは崩れることになる。高い価格を設定していても、よそで安く売られているのであれば、消費者はそちらに流れる。**ディスカウントショップ1つできれば、周囲の既存店が大きな打撃を受けるのと同じなのである。安土で楽市楽座を行えば、畿内にある「座」は大きな打撃を受けてしまう。安土に売り上げを奪われないためには、価格競争をせざるを得なくなる。**

また、これまで見たように信長は、関所の撤廃や、街道の整備により、商品の流れを飛躍的に高めた。座はいつまでも独占販売権を維持することができなくなり、いきおい衰退していかざるを得ない。

実際、**永禄11（1568）年、信長の上洛以降、座は急速に衰退するのである。信長の京都所司代村井貞勝は、京都の諸座に安堵状を与えている。つまり、座を認めたのである。しかし、天正11（1583）年頃からの諸座は、ほとんど活動をしなくなっているのである。奈良でも同じように、座が安堵されたにもかかわらず、天正15（1587）年ごろから活動がほとんどなくなった。（『中世日本商業史の研究』）**

信長の楽市楽座は言われているほど大規模なものではなかったが、言われている以上の経済効果があ

ったのだ。

どうです。信長の実施した楽市楽座は、確かに、彼の支配したすべての地域で実施されたわけではありません。ごく一部でした。京都でも座を認めています。しかし、それは彼の政治権力がまだそこまでだったということです。もし、日本全国の統一を果たしていれば、全国で実施していたかもしれません。

信長の楽市楽座は、言われている以上の経済効果があったのです。一言で言えば、「価格破壊」が進んだということですね。そして、**それにより痛手を受けたのが比叡山延暦寺や奈良の興福寺など寺社勢力**でした。

なぜなら、信長が彼らの収入源である関所を撤廃し、「座」を破壊したからです。現代の学者が感じることのできない(?) 経済的ダメージを、実感せざるを得なかったのが比叡山延暦寺や興福寺だったのです。

以上です。次回はこのシリーズ最終回で、「比叡山延暦寺のすごさ」についてまとめていきます。

今回もお読みいただき、ありがとうございます。